タイトル未定！！！

坂上　葱久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
タイトル未定！！！

【Ｎコード】
Ｎ７２０６Ｗ

【作者名】
坂上　葱久

【あらすじ】
悪魔と天使と自分が繰り広げる圧倒的スペクタクル！

火が踊り、水が舞い、雷鳴は轟き、大地が割れるとき、それは舞い降りた。

主人公に隠されたとある秘密とは！？
天使と悪魔とは一体なんなのか！？
そして、この世界の謎とは！？

全米が泣いた！　興行収入、観客動員数うなぎのぼり（当社比）
ヤツらがこの秋、ここに降臨！　カミングスーン！

赤字覚悟の大放出！　店長の本気をここで見せる！
モットーは「全力投球」。やりきります！　出し尽くします！
燃え有り、感動有り、エロ有り！？　の展開から目が離せない。
この秋、大注目の一作！

※上記は内容と著しく異なる場合がございます。

始まりの会議

これは、天使と悪魔と自分の三者会談の模様を淡々と書き並べたものです。
過度な期待をするだけ無駄です。
「っと……」
これだけ書いておけば、たとえ後でスベっても大丈夫だろ。
「女子高生みたいな言い方で『だからぁ～書いておいたじゃないですかぁ～？』みたいな言い訳すんのか？」
「うるせぇよ！　最近の流行に乗っかってみただけだよ！」
「あぁ、あの三姉妹の日常を描いた……」
「わーわーわー！！！！！　それ以上言っちゃダメ！　……イヤ、それだけで特定できるのもたしかにすごいことなんだけれども……」
「というわけで、今日も来てやったぜ！」
「来ましたよっと」
悪魔と天使がどこからか用意した座布団によっこらしょっと腰を落ち着ける。いつの間にか煎餅とお茶まであるし。
毎日のように開かれる会談。会談っていうか雑談に近いけれど。
「んで、今日はなんの話する？　……んっ！　これ辛いな、おい！」
唐辛子煎餅をかじりながら悪魔が口火を切る。
「昨日はたしかクラスの女子に話しかけられたって話でしたよね？」
わざわざ昨日の話を繰り返してくれる天使はここを書くに当たってすごく優しい存在だ。つまりは、物語における説明役という不遇の立場を買って出てくれているというわけで。
「今日は二人に相談っていうか、もう決定事項だから重大発表があるんだ」
「そっか、まぁがんばれや」

「まだなにも発表してないよ！？」
「これから長く険しい道が続くと思いますけど、あなたならできると信じてますわ。……ところで、ねぇ、悪魔？　こないだの合コンの話どうなった？」
「全然興味ないのバレバレ！　ていうかあんたら悪魔と天使に合コンとかあんの！？」
　悪魔と天使が同じ場所で、しかも同じ煎餅とお茶をすすっていることも驚きだが、まさか合コンするほどの仲だったとは！
「あぁ、あれか……すまね、合コンの話してた相手が三日前に彼女できやがった……しかも相手ってのがめちゃカワイイルシファーらしいんだ……ちっ、裏切り者め」
「え？　もしかして、中止？」
「悪いな」
「ガーン！！！　私がどんな気持ちで合コンを待ってたかわかってんの！？」
　擬音を声に出して言うヤツを初めて見た。ていうかそっちの話盛り上がりすぎだろ。
「あ……あのー……重大発表の件なんだけどー……」
「あぁ？　まだなんかあんのか？」
　なんか知らないけど悪魔の不興を買ったようだ。こっちはまだなにもしゃべってないっていうのに。
「冒頭の話でなにか気付かなかった？」
　とりあえずヒントを出してみる。
「イヤー特にはなかったわねぇ……ポリポリ」
「なかったな。まったくのいつも通り。よかったじゃねぇか、世は並べて事も無し。お前の座右の銘だったろ？」
「まぁ、たしかにそうだけど……って今はそういう話じゃなくて！　明らかにおかしな冒頭文だったろうが！　お前らも何気にツッコんでたろうが！」
「すまねぇ……俺、過去は振り返らない主義なんだ……」

「今どき中学生でも使わねぇよ！　そのギャグ！」
「んーなんか、物語の冒頭文っぽかったといえば、たしかにそうだったような……」
「そそそ！　いいよー近くなってきたよー！」
「み〇み〇でも読んだ？　あれの最新刊まだ読んでないのよねー。貸してくんない？」
「ギャー！！！　言いやがったコイツ！　せっかくぼかしておいたのに！」
　なにこれ？　この話ってこんな感じで進んでいくの？　当初の目論見から早くも脱線気味なんですけど！

「ともかく、あんたらそこに正座！　マジで重大発表だから！」
「ちっ」
「はぁ～」
　不承不承とあぐらをかく悪魔と天使。天使さん……あんた一応、女って設定なんだけど。
「コホン……では、発表に移りたいと思います」
「発表は発送をもってかえさせていただきます」
「変なテロップを出すな！」
「ドルルルルルルルルルルル……」
「ドラムロールはありがたいけど、リアルに太鼓叩くな！　近所迷惑だろうが！　しかもどっから持ってきたんだ！」
「ツッコミはいいからよ、はよ発表」
「発表はよ」
「……」
　ちっくしょ……。
「えー、われわれの三者会談という名のカオスな雑談も今日で……えーと、多分一年くらい。そこで、それを記念して、お話にすることにしました！」
「「……」」

静まり返る自室。え？　騒がないの？　さっきまであんだけ騒いでたのに？
「なんの発表かと思えば……」
「とんだ拍子抜けですわね」
「ええー！？　なんで？　なんで驚かないの！？」
いつの間にか普段どおり、ベッドの上でごろ寝をする悪魔とクッションにもたれかかる天使に聞く。
「イヤ、勝手にすればいいさ。ただ、おもしろくねぇぞ」
「私としてもこれは読み物にするにはいささか……クソつまらないと思うんですの」
「ひどすぎんだろお前ら……」
せっかくの決心を潰された思いだ。
「それはそれとして、媒体は？　どこに書いたものを出す予定？　まさか日記の中とか言わないでしょうね？　……それは痛すぎるわ……黒歴史確定ね」
「そんなもん、みんなあるだろ。かくいう俺も『俺が考えたサイキョーの黒魔法』ってのがこないだ部屋を片付けてたら見つかってさ、やけにブリザードとかフレイムって文字が躍ってたぜ……もはや、あれ自体が黒魔法だな。効果は自分へのダメージだけど」
あああああ、自分も思い出してしまった……迷路とか書いた記憶がある。友達同士で交換したりして、お互いに解いたな。そこまでならまだしも、その迷路の名前っていうのが、『邪』とか『王』とか『炎』とか『殺』とか『黒』とか『龍』とか『破』という漢字がやたらと入っていた気がする。あれに名前をつけるとしたら、デ〇ノートだな。見つけられたものは書かれた内容で死ぬ。精神的に。
「ネット上に出そうと思ってるんだ。簡単だし、どんな文章書いても、面白くなければスルーされるだけだし」
「そうやって逃げ道を確保しておくのよね」
「ぐ……」
たしかに指摘されたとおりだ。不特定多数の誰かに見られる場所

というのは、裏を返せば、誰からも見られない可能性があるということだ。
閲覧された回数がそのまま評価に繋がったりするわけだが、別にそれが少ないからといって凹むことはない。別に作家になりたいわけでもないし、いわば作家モドキになりたいだけなのだ。
自己満の世界。それが繰り広げられれば満足。中にはそれだけでは終わらなかったりする才能を持ち合わせた人もいるだろうし、そういったものを目指して真剣になっている人もいるだろう。
しかし、大半はそうではないのだ。単純に趣味であること。それが一番なのだ。
「だって、面白く書けるか自信ないし……」
つい、漏らしてしまう。すると、悪魔がやけに真剣な顔つきで言ってきた。
「だぁ～！　だからお前はダメなんだよ！　ダメもダメ！　ダメ人間の極み、アーッ！」
「どさくさにまぎれて必殺技放ってんじゃねぇよ！」
「ま、それはともかくだ。やる前からあきらめるのはお前の悪い癖だ。いいじゃねぇか、それこそ誰にも読まれなかったとしても。書くことに意義があんだよ、そういうモンってのは」
悪魔のくせにやけに良さげなこと言いやがる。
「それにな、そういうところの人間ってのは目が肥えてるもんだ。あれやこれやと批評するのは大の得意だし、それはお前もそうなんだろう？　そういうヤツらに指摘してもらえばいいんだよ。あとはただそれに反発することなく、色々試してみること。別に商業ってわけじゃねぇし、お前の言うところの趣味ってヤツだ。幸い、それを書く時間くらいは腐るほどあるんだろう？」
なぜか両腕を掲げ、ドヤと言わんばかりにポーズをとる悪魔。それはクイズに正解したときだけにしておけ。
「で、だ。今の部分はできれば目を引くように書いてくれな」

「お前、それが目的だったろ？」
あれだけ言っておいて、自分は目立とうとする。汚いなさすが悪魔きたない。
「ていうかこの雑談をそのまま文章にするだけなんだから、面白いかどうかはお前らにもかかってるんだからな？」
「あら、そういうこと言うの？　でも、書くのはあなたなんだし、フィクションな部分を作ったって誰も気付かないわよ。そもそも、私とか悪魔の存在だって……」
「わーわーわー！　それ以上言うのなし！　なんか根底から覆りそうな気がするから！」
「ま、それはともかく、それってもうタイトル決めてあるの？」
「あ」
そういえばまだ決めていない。書く内容ばかり気にして、大切なタイトルってもんを決めるのを忘れていた。
「タイトルってのは、その物語の顔と言ってもいい。タイトルだけで読みたくなるって感じじゃないとな」
なぜか物知り顔でご高説を唱えてくる悪魔。そのネタさっきやったから。
「最近、流行りのタイトルってどんなのがありますの？」
「ちょっと待ってくれ。じゃあ今回は『タイトル決め』がメインテーマってことで。チラシ持ってくるから、その間にお前ら適当に案でも出しといてくれ」
なんだか一気にやる気が出てきた。二人もやる気みたいだし、どうせなら協力してやったほうがいいだろう。書く作業は自分だけだけど、普段からその他に協力してもらえれば、きっといいものができるに違いない。
そう心躍らせながら、自室に戻ってくる。
「お待たせ！　なんかいいの思いついたか？　っておい！」
戻った先に広がっていたのは、ベッドで寝転びながらみ〇み〇の新刊を読む天使と、ＰＣに向かってしゃべり続ける悪魔だった。

「え～？　延長？　今、ポイントねぇんだよ……ま、そういうわけでお前らコミュ入ってくれよ！　おっつ～」
「おい」
「やっべ！　最後の最後で親フラだよ！　動画にされたらどうするんだよ！」
ＰＣの向こうで流れるwとか乙の文字。
「なに全世界に向けてしゃべってんだ、コラ。そんで俺は親じゃねぇ」
「いいだろ～？　最近はイケボですねとか顔出してくださいとか言われるんだぜ？　どうだ？　結構、人気者だろ？　つーわけでカメラ買ってくれ」
「買わねぇよ！　つか、それただ単に遊ばれてるだけだからな？　実際、そんなにお前に興味あるヤツいねぇからな！　ていうかタイトル考えてろって言ったろ？」
「ええ～？」
明らかに不満そうにゆがむ二人の顔。うん、そんなお前らの顔見たいヤツラなんていないから安心しろ。

とりあえず二人をテーブルの周りに座らせて会議に入る。
「というわけで第一回タイトル決め会議をやるんだが……」
「あら、てことは第二回タイトル決め会議もあるのかしら？」
「いきなり揚げ足を取るな！」
まったくやる気のなくなった天使がそういうところだけには喰いついてくる。そういや、小学校のときの委員会でこんなヤツがいたような気がする。
「ったく、それじゃあ第一回会議、内容はタイトル決め。これでいいか？」
「もうちょっと面白い名称にしなさいよ」
「うるせーうるせー！　それが浮かばないから、みんなで考えようって話だろ！」

もうそれ以上言う事がないのか、お茶をすする天使。まさか、コイツ邪魔したいだけだろ。さっき漫画を取り上げたのを根に持ってるみたいだ。
「とにかく！　タイトルを決めないと今回終われないんだから！　真剣に考えないと！」
ここまでの出来事を全部書いたら何文字になるだろう？　そろそろ終わらないと冗長だとか言われそうで怖い。
「はい」
「はい、じゃ悪魔くん」
悪魔が律儀に手を挙げたので先生っぽく、くん付けで当ててみる。
「ここは流行りに乗っかって、『とある三人の妄想雑談＜ファンタジー＞』とかどうよ？」
「あぁ、それはヤバイな。なにがヤバイってそれ系多すぎて迷うくらいヤバイな。却下」
「じゃあ『天使の一存』ってのは？」
「お前、それ二話目以降行かなくてもパクリ確定だし、言ってしまえば設定似てるし（書き始めて気付いたことをここに記す）、なにより俺と悪魔どこいった！？」
「毛色を変えて、俺と天使と悪魔……獣」
「無理矢理似せようとしたろ！」
「非日常とかどう？」
「これ以上ないくらい日常だよ！」
「じゃ、にちじょ……」
「それ以上言うと怒るからね？　たった一単語なのにここまで気を遣うのは久しぶりだよ？」
「はぁ……もうすぐ最終回なのね……割と好きな類のアニメだったのに……」
憂いを帯びたため息をつく天使。毎回、番組改編の頃になると同じセリフを吐いているのだが。
「ていうか登場人物って俺らだけなん？」

「あ、え～、うん、まぁ、とりあえずはそうなるだろうね」
　そういや考えてなかった。三人の会話をダラダラと書くだけだと間違いなくマンネリ化する。
「じゃあ将来的にはバンド展開から同人でＣＤ発売目指すってことで、『すりーぴーすぶ！』とかどうよ？」
「将来設計が意味不明だし、なによりそのタイトルだと誤解するだろうが！　無駄に部つけやがって！」
「私たち天使と悪魔が血で血を洗う戦争に、あんたが巻き込まれるビックリする内容は？」
「そういうシールが昔、流行ったんだよっ！」
「う～ん……それじゃ、参考に聞きたいんだけど、その小説投稿サイトではどんなジャンルが流行ってるの？」
「一概には言えないけど、やっぱりファンタジーとか恋愛系とか、なんだか主人公チートだったりが多い気がする」
「ま、書きやすいっちゃあ書きやすいもんね。内容に詰まったら、主人公が覚醒みたいな感じ？」
「おっと、それ以上言うと、どっかからお叱りがきそうなんだが。俺はチート大いに結構だぞ？　熱い展開とか中二病とかも好きだし」
「なにより文才のないあなたが他の人のことをとやかく言う資格はないと思うの」
　それはたしかに……。どんな面白い設定でも、十分に表現しきれなかったり、辻褄が合わなくなったらそれだけでショボンとしてしまう。
　そうなるくらいなら、それなりにありきたりな内容で結末が予想できても綺麗に纏まった文章のほうが読んでいて心地いい。新感覚の設定で物語を書くのは、本気でその世界を持っている人だけが書けばいい。しかし、そのためには様々な構想や勉強が必要になってくるから難しいのだけれど。
　それからボケだったり俺に対する厳しい意見が飛び交った結果、

なんにも決まらなかった。
　そのうち悪魔は「あ～もうだりぃ……お前適当に決めろや」とか言い出す始末。
　一応出た案としては、基本的に三人がメインであること。ただのダラダラした内容であること。天使とか悪魔とか出てくること。……あと、これは自分自身の意見なんだが、パクらないこと。
「タイトル決めって案外難しいものなのね……」
　嘆息する天使。途中からは真剣に考えていてくれたので、その言葉には重い意味が込められている。
「こんなにセンスを問われるものだとは思わなかった。なんとなくいい感じのが思い浮かんでも、どこかのタイトルと似ていたりするし、かといって内容から逸脱しすぎても詐欺っぽいし」
「が～！　もう終わろうぜ～。いつもはもっとテキトーな話ばっかだから、頭使うのめんどくせぇよ～」
　こっちは最初からボケっぱなしで、もうボケが浮かばないとなってからはただゴロゴロしていただけだった。
「こうなったら誰か他の人に考えてもらおうぜ！　俺らにはもう出てこねぇよ」

……。

「「それだ！」」
　俺と同じタイミングで天使が叫ぶ。
「読んだ人のほうが客観的に物事見ているだろうし、指摘の部分をちょいちょい摘んでタイトルに加味してもいいし！」
「完全に人頼みだけどね。自分では見えていないところが映るかもしれないし、タイトルとかはセンスのある人たちに任せたほうがいいもんね」
　うなずき合う俺と天使。これは決まった……これを読んだ人たちに考えてもらおう。

「……あのー……ちょっといいか？」
興奮する俺達をよそにそろそろと手を挙げる悪魔。コイツにはあるまじき謙虚さだ。
「もしも……もしもの話だけどな。誰も案を出してくれなかったら？　読んでくれたとしてもそこまで興味を持ってくれる読者っているのか？」
「「……あ」」
また同じタイミングで気付く。忘れてた。こんな場末の話、誰が興味を持つのだろうか？
「ま、まぁ、もしもの話だからな。お前が面白おかしい内容が書ければ問題ないんだ」
「そ、そうね。じゃ、そういうことであとはがんばってね！　ファイト！　信じてるから！」
マジで？　マジで、そんなに期待しているの？　ならなんでそんなに俺から目線をはずそうとするんだ？
あ、悪魔が帰り支度始めてる。天使もそれを見て、ちゃっかりみ〇み〇の新刊をカバンに詰めてる。
「それじゃ！　また明日～……」
「私ももう遅いから～……」
ダメだこいつら！　もう今日は終わったものにしている！　一話目にして存続の危機！？　それどころか書くことすらあきらめさせようとしている！？
そうこうしているうちに二人はなんかの空間の中に消えていった。
「あ、あああああああ……」
あの卑怯者どもめ。明日は絶対仕返ししてやる。
とその前に……。
「よし！　ま、こんなもんだろ。推敲するのはやめておこう。考え出したらキリがなさそうだし、書くこと自体あきらめてしまいそうになるし。ふふふ……見てろよ、悪魔に天使」

黒い笑いを浮かべてエンターキーをターン！　っと叩く。
あ！　そうだ。あれも付け加えなくちゃ。ふぅ……こんなもんだろ。
とりあえず今日はこれで終了。次がいつあるかわからないけど、書いたことに意義がある……ハズ。
……まだスタートラインにも立っていない現状からは目を背けたままにしておいた。

※※※※※※※※※※

～タイトル募集のお知らせ～
この物語にはタイトルがありません。ていうか思いつきません。
もし、読者様の中で、無駄な時間かもしれませんが、考えていただける方がいましたら、是非よろしくお願いします。

今後の方向性会議

「おい」
「ねぇ」
悪魔と天使が両側から攻めてくる。うん、責めを受けることはわかってるんだ。
「お前、編集ミスしたろ？」
「まさか短編集になってるとは思わなかったわ。書く以前の問題としておっちょこちょいすぎるんじゃないの？　そんなんだから短絡的に『俺は文学王になる！』とか言っちゃうのよ」
「言ってねぇ！？」
「ま、それはさておき謝っとけよ」
「うぅ……投稿してすぐに気付いたとはいえ、編集しなおすために消去したことをここでお詫び申し上げます」
「大変遺憾だ。各所に迷惑がかかっていることは承知だろう？」
「しかし、わたくし天使、悪魔どもはこの実態を知る余地はなく、またその中身についても触ることができなかったため、今は問題の原因究明に全力を挙げている段階でございまして……ただ早期辞任をするということは現在、考えておりません」
ものすごい責任逃れの発言が飛び交っている。最近、ＴＶでよく聞く発言だらけだ。
……最近だけじゃないか。生まれてこの方聞き続けたセリフだから、空でモノマネできる。

と、ここまで話をして思い出す。
「そういえば、俺もお前らに言いたいことがあるんだった」
「なんだね？　新設部署の大臣くん」
く……完全に尻尾切りをさせる予定のポストじゃないか！　不用

意な発言はメディアに叩かれるし……って話はそこじゃない！
「お前ら勝手にあらすじ書いたろ？」
「「……」」
だんまりか。まぁいい。
「なんだよあのあらすじ！　なーにが編集できないから責任がない、だ！　色んな煽り文句書きやがって！　途中から映画とかパチンコ屋みたいになってたじゃねぇか！　編集ミスした後に気づいたから注意書きを書けたからよかったものの……ともかく、そのせいでちゃっちゃと二話目をアップロードして、釈明会見しなくちゃならないハメになったろうが！　あらすじにだまされた方々、大変申し訳ありませんでしたァ！」
「でも斬新だったでしょ？」
「斬新すぎて嘘だらけじゃねぇか！　Ｊ○Ｒ○に訴えられたら勝てないレベルだぞ！？　ただでさえパロディでギリギリのラインなのに、あれじゃ詐欺だ！　燃えもなければ、感動もない。ましてやエロなんて書けるわけないだろ！」
エロってのはその辺に熟知した人が、様々な表現力を得て、ようやく書けるものだ。俺のように経験の浅い、表現力のないヤツが書けるわけがない。……それに、恥ずかしいし。
「それじゃ実行してしまおうぜ。幸い、これはフィクションだ。好きなようにお互いが書けるだろ？　まずは俺がお手本として燃え展開ってのを書いてやるぜ」
そう言って、ＰＣに向かう悪魔。こいつにそんな展開書けるだけのスキルなんてあるのか？

俺の名前は悪魔。
しかしこれは本名ではない。
ただ周りがそのように俺のことを評するだけだ。
それは俺の性格や見た目で言っているわけではないことを俺は知っている。

この右手。
この右手によって俺はそう呼ばれることになった。
俺の仕事はこの右手で天使と呼ばれるヤツらを駆逐することだ。
今日もヤツらが俺の仲間との熾烈な争いを繰り広げている。
「ふぅ……ヤツらめ……無差別に攻撃してきやがって……」
「ヤツらは女子供関係なしに襲ってきやがる。気を引き締めろよ。昨日もヤツらに南西方面の連中がテロ攻撃を受けたようだ」
「そうだ……な！？」
途端に空が白く染まる。ヤツらだ！　ヤツらが襲来したのだ！
「に、逃げろ！　さすがにあの数は相手にできない！　今、ここで死ぬわけにはいかないんだ！」
「ふ……そうしたいのは山々なんだがな……昨日の襲撃、実は俺は南西方面の軍にいたんだ」
「な……なんだ……と？」
「ほら、この通りさ。右足がふっとばされちまってる。それでも運のよかったほうさ。ほとんどは殺されちまった。そして、今日こそ命運尽きたようだな……」
痛々しく傷口を見せる戦友の悪魔。その顔は一種のあきらめにも見てとれた。そして、わかってしまったのだ。こいつはここで死ぬつもりなのだ、と。
「行け。俺はここでアイツらをひきつける。なぁに心配することはねぇ。俺の身体にはＴＮＴ爆弾が埋め込まれているんだ。コイツを爆発させるときがきたようだ」
「な、なにを言ってるんだ……お前には妻と二人の娘がいるだろう！」
「ふ……あいつらはお前に任せた。お前ならきっと俺の家族を幸せにしてやれる。知ってたか？　俺の妻、つまり俺とお前の幼馴染なんだが、実はお前のことが昔から好きだったんだ」
「そんなことはどうでもいい！　今、必要とされてるのはお前だろう！　ひきつけるのは俺がやる！　だからお前はっ……！」

そこまで言ったところで手で遮られる。……そうか戦友よ。お前はそこまでの覚悟を……。
「せーの、でいくぞ！　じゃあな、戦友。お前と戦えて俺は楽しかったぜ……せーのっ！」
「「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！」」
同じ咆哮が逆に向かっていく。そして――。
俺は決意した。この右手とともに戦い抜くことを。

「どうだ？　これが燃えだ」
ふふんと鼻を鳴らす悪魔。そして両手を掲げ――。
「イヤ、そのネタ、前もやったから。どんだけ好きなんだそのポーズ」
とりあえず遮っておく。
「たしかに燃え展開かもしれないけど、これ、この後どうなるの？」
「その後、戦友の死を受けた俺こと主人公は自分を責めることから始めるんだ。なぜ、あのときもっと引き止めなかったとかな。そして、戦友の妻に報告しにいったときに色々と諭されるんだ。そこから修行の日々がおよそ単行本一冊分くらいは続く」
「なげぇよ！　どんだけ強くなるんだよ！　ていうか最後の文のせいで打ち切りっぽいだろうが！　悪魔先生の次回作にご期待くださいみたいな感じになってるから！」
いきなり戦友が死んでしまったら感情移入も何もないだろう。設定もいまいち要領を得ないし。
「ま、でも、これじゃ最近の少年向け小説は無理ね。使い古されすぎて、巡り巡って中高年のハートは掴めても、最近の子供たちには受けないわ」
「なにおう！？　じゃあお前が書いてみろよ！」
「フフッ。いいのかしら？　この天界のエンジェルと呼ばれたこの私に書かせても……」
イヤ、天使だからそのまんまなんだが、というツッコミを華麗に

スルーして、ＰＣの前に座る天使。
「私が得意とする分野、感動モノでその勝負受けるわ！」
「あの葉が散るのが先か、私の命が散るのが先か……」
ふと、そんなことを呟く。
私は不治の病。
そう診断されたのは、私が物心つく前だった。
だから死は怖くない。
でも、この場所にいることが怖かった。
「死ねるのなら今すぐ死んでしまいたい……」
願望。
もう、希望なんてない。望みといえばそれくらいなもの。
窓際にある私のベッドは、外の景色が楽しめる。それが唯一の楽しみといってもいい。
外に目をやる。
すると、窓がカガミの役割を果たして、逆方向に誰かがいるのが見えた。
「天使ちゃん……そういうことを言っちゃいけないよ……」
隣のベッドで寝ていたおばあちゃんだった。
まったく会話をしたこともないし、私には仲良くしようという気持ちすらなかった。
「おばあちゃんのたわごとだと思って聞いてね？　おばあちゃんには大好きな人がいた。その人はもういないけど、でも私の心の中には生きているの。その人との昔話なんだけどね……（中略）……というわけなの……」
「そ、そんな……わたし、わたし間違ってた！　おばあちゃん！　ありがとう！　わたし、これからは愛に生きるわ！」
「うんうん、やっぱり若い者はええのぅ……」
それからおばあちゃんと仲良くなった。みかんをもらったり、おばあちゃんが昔よく遊んだ遊びをしたり、一緒にＴＶを見たり。

そうやって一ヶ月が経ったある日。
「天使ちゃん……おばあちゃんね。怖かったの。でも、天使ちゃんのおかげで勇気が出たよ」
いつもどおり一緒にＴＶを見ているとおばあちゃんが急に告白し始めた。
「なにがー？」
「ううん……なんでもないの……それにしてもこの司会者ほんとに黒いわよね。肝臓が悪いって噂は本当みたいね」
そのときはおばあちゃんがなんのことを言っているのかわからなかった。
それからさらに一ヶ月が経った。
おばあちゃんがいなくなった。
ベッドは綺麗にメイクされて、おばあちゃんの私物や、一緒に遊んだ数々の道具も消えていた。
それでも私は待ち続けた。
約束したのだ。どちらかが元気になったら、絶対にお見舞いに来るんだって。
きっと元気になって退院しただけなんだ。そう思うことにした。
季節が変わった。
まだおばあちゃんはこなかった。
年が変わった。
まだおばあちゃんはこなかった。代わりに新しい人がおばあちゃんのベッドを使い始めた。
さらに年が変わった。
それでもおばあちゃんはこなかった。日々、襲ってくる苦痛に耐えた。耐えることができたのはおばあちゃんが来ると信じていたから。
それから何年も経った。
もうおばあちゃんのこともほんのり覚えているだけになった。
そして、私は退院した。

不治の病とされていた私の病気の治療法が見つかったのだ。医学が進歩するくらい年月が進んでいた。
それから、恋人ができて、結婚もして、子供も二人もできた。
あるとき、私はカゼを引いて、昔、入院していた病院に行く機会ができた。
懐かしいな、とか思いながら、自分が何年も暮らしたベッドを見に行った。
そこには……おばあちゃんがいた。
「あら、天使ちゃん。お久しぶり」
あの頃とまったく変わらない声、姿。違うのは私のベッドにいるということだけだった。
思わず涙が溢れてきた。
「あらあら天使ちゃん。大きくなったのね。それに……幸せなのね？」
うなずくことしかできなかった。それから涙混じりに昔話に花を咲かせた。
「それじゃ、私そろそろ行かなくちゃならないから……またくるね、おばあちゃん！」
おばあちゃんはうんとだけうなずいた。
そうして、その日は家路に着いた。
それから一週間。まだカゼが治っていなかった私はまた病院に行った。そして、子供の頃からの主治医にその話をした。すると、「その患者は既に何年も前に亡くなっている」というのだ。
私は病室に確認しに行った。少しのあせりを含みながら。そして、その不安は現実になった。病室がないのだ。
私は呆然とした。既におばあちゃんはいなかったのだ。あのとき、うんとうなずいたおばあちゃんはもう……。
いつの間にか私は屋上にいた。なぜか高いところに登りたくなったのだ。夕日がまぶしい。少しにじんで見えるのは気のせいだろうか？

そんなことを思っていると、急に風が強く吹いた、すると――。
「あー疲れたー！　もうやめー！」
「ええ！？　ここまで引っ張っておいてここで終わり！？」
久しくこっちにいなかったせいか急激にテンションを戻すのに時間がかかった。
「だって疲れたんだもーん！」
そういって持ち込んだビスケットとオレンジジュースをあおる天使。
「あんだけ長々と書いておいてそれはないんじゃないの！？　もうすぐ終わりじゃん！　最後まで書ききろうよ！」
「えーだってぇ～もう終わりは書くまでもないっていうかぁ～アレだよアレ。おばあちゃんの名言みたいのが風に乗って聞こえてきて、感動して終わりだよ」
「見も蓋もねぇ！？」
天使は物語うんぬんの前に根気がなかった！
「でも、そこの黒いのは感動してるわよ？」
「うごぉぉぉぉ～！　ええ話や～！　おばあちゃんっ子やねん自分」
なぜか関西弁で感動している悪魔。ていうか途中、大事な部分が中略されていたんだが、それでも感動できたのか？
「ていうかダメだよ、こんなの。たしかにお年寄りとか死ってのは感動モノには必要な要素かもしれないけど、最近はそういうのなしのほうが受けるんだから。簡単に言うと、あざとい！」
「じゃあ、アンタ書けるの？」
ぐ……ま、まぁたしかに。発想力の前に俺には書けないかもしれない。たとえあざとくても感動する人がいるなら、それはそれでいいのかもしれない。
「ま、これが天界のエンジェルの実力ってヤツよ。すごいでしょ？　ちゃんと尺も稼いだし」
「それは言うなぁ！　途中で良心の呵責に訴えられたんだから！」

「ところでなんか反応あったのか？」
ようやく泣きやんだ悪魔が話を変えてくる。
「？」
しかし、なんのことだかわからない。
「ばっかおめぇ、タイトルだよタイトル。あれ、どうしたんだよ？
まさかまた未定とかタイトルにするんじゃないだろうな？」
「あーうん。まだこの話書いてるうちにはタイトル案きてない……」
「やっぱつまらなかったのね……」
グサッ！
「まぁ俺や天使の文章力ならまだしも、な」
グサッ！
ゆうしゃは　しんでしまった！
「おお、ゆうしゃよしんでしまうとはなさけない！　ていうかＨＰ少なすぎるでしょ」
「俺は現代に生きるただの一般市民Ａだからな！　ゆとり世代はＨＰ少ないっていうのは仕方の無い仕様なんだよ！」
そりゃ想像上のお前らと比べられるほうがおかしい。こちとら純情少年なんだぞ？　盗んだバイクで湘南を爆走してやろうか？
「ま、とにかくまた未定で出すしかないわね……でも、引き続きタイトルだけは募集しておいてね」
「はい……すいません」
俺にはリアルで主人公属性はないみたいだ。どちらかと言えば、主人公が色々苦難を経験して、大人になったとき、自分がとある国の王様だと気付くまで、その王座を守っていたおかしな名前の人くらいの立ち位置だ。
長々とたとえを出したが、ようするに脇役。しかも脇役も脇役。印象に残りやすいはずの名前なのに出てこないくらいの。この手の名前がスラッと出てくるヤツは頭の回転と記憶力がいいヤツだ。

「仕方ないな。路線を変えるか？」
「二話目にしていきなり！？」
「あなた変身とかできないの？」
「近くに天使と悪魔がいる状況で変身できたとしても、なんの感動もありませんがね！」
「じゃあもうちょっとキャラを立てるとか？」
一応、自分の中ではツッコミキャラというものがあると思うんだけど、たしかにまだまだキレが足りないような気がする。
「オーケー。ここも流行りに乗っかろう。ツンデレだ」

俺はただのしがない一般人だ。べ……別になりたくてなってるわけじゃないんだからね！

「ちょっと待て。そもそも男のツンデレに需要あるのか？　ていうかこの文だとただの負け惜しみにしか聞こえないぞ」
ツンデレはカワイイ女子が二次元であるからこそ成立するのだ。
男はもちろん、三次元にツンデレは危険すぎる。……きっと友達いないんだろうなぁ。
「それじゃあ……執事とかどう？」

おはようございます。お嬢様。今朝は良い天気ですよ。そうですね、こんな朝にはアッサムティーなどいかがでしょうか？
……。
……。
……。

「お嬢様は今何処！？」
「そういえば仕える相手がいないわね……」
俺と天使と悪魔しかいないこの空間に急にお嬢様を呼んでしまうわけにはいかない。というか呼べるわけもない。

「それじゃあ死の線が見えるという高校生とかどうだ？」

これがモノを殺……。

「あぶねぇ！　つい好きな部類だったから流されそうになった！
これじゃまんま過ぎるだろ！」

好き過ぎるとボーダーラインが見えなくなるのは悪い癖だ。やめておこう。

「それじゃあ、実は女なんだけど、壷を割ってしまったがためにホスト部に強制的に参加……」

「そもそも男だし！？」

「こうなったら仕方ない。ＢＬ路線に走るしかないか……今ならまだ方向転換できるぞ？」

「物語が方向転換する前に性癖が転換されそうなんですけど！？」

「むぅ～……文句ばっか言ってちゃ始まんないでしょ？　ん、あ、そうだ！」

なにかに気付いたのか天使が手を打つ。

「語尾よ！　語尾！　言葉の最後に特徴的な語尾を付けるのよ！
これなら性格も性癖も性別も変える必要ないでしょ？」

「なるほどな……じゃあ語尾と言えばこれだろう語尾界の金字塔『にょ』！」

もっと文才が欲しい……にょ……。

「キャーカワイー」

「そんな棒読みで言われて誰が喜ぶか！」

「う、うん、これは俺が悪かった……すまん」

珍しく悪魔が素直に謝った。それほどひどかったということだろうか？

「それじゃあこれはどう？　『なのです』！」

俺の名前は未定なのです。あうあうしちゃうです。

「嘘だ！」

「イヤ、一個も嘘ついてないけど……ていうかカワイイ路線は激しく違う気がするからパス」

「そうは言っても、男で語尾系キャラって少ないのよねぇ……あ！これはどう？」

なぜか付け歯とビンの底のようなメガネを渡される。

デュフフフフ、我輩が主人公でヤンス。これだけは譲れないでヤンスよ。

「すげ～下っ端っぽい……」

「お前がやらせたんだろうが！　……でヤンス」

なんだかリアルでそういうキャラなせいか、今までで一番しっくりくる。だが、主人公だ！

「もうこうなったら主人公ってことを前面に押し出していこうぜ？」

俺がこの物語の筆者兼主人公だしゅじんこー！　もっと面白いものが書けるようがんばるしゅじんこー！

「……斬新すぎてついていけねぇ……」

「いまだかつてここまで主張する主人公がいただろうか……」

以下、反語。

あーだうーだ言いながら、あれこれ試してみたが全て却下。飽きるのも時間の問題だった。そこではたと思う。

こんな感じでいいのだろうか？

俺はここまでの話を物語として世に送り出していいのだろうか？

悪ふざけもすぎると犯罪になるかもしれない。
「やめだ、やめ！　今のままでとりあえずは進んでみる！　それでもダメだったら……そのときはそのときだ」
とりあえず言葉は濁しておいた。これは俺達のためだ。あまり長く触れすぎるとよくないことはわかる。きっと、この物語の根幹に関わるなにかに抵触してしまうだろう。
さっきまであんなに騒がしかった二人も黙ってしまう。
「悪い悪い。それで？　俺はどんなキャラがいいんだ？」
「……別に今のままでいいだろ。なぁ？」
「そ、そうですわね。私達がボケてあなたがツッコむ。それでいいじゃありませんの」
それきり誰も口を利かなくなってしまう。
え？　なにこの空気？　二話目にして、なにこのシリアス展開？
こんなの望んでないんだけど。

とうとうイソイソと帰り支度をする二人。
なんだか俺のせいで空気を悪くしてしまったみたいだ。みたい、というかその通りなので、引き止める言葉も見つからない。
そうやってぐずぐずしていると、いつもの謎の空間から出ようとする悪魔がこちらを向くことなく話し始めた。
「……ただ、ただよ……お前がやめたくなったらいつでもいいんだぜ？　そもそもこれはお前が始めたいから始まったんだ。お前の好きなようにしたらいいさ。でもな、せめて自分で納得いくくらいまではやってみたらどうだ？」
すると、天使も触発されたようにしゃべり始める。
「そうですわよ。最初に言ってたじゃありませんの。これは趣味だ！　って。趣味は自分が好きでやること。それ以上の資格も条件も必要ないんですのよ。ましてや、タイトルなんて、ね」
それだけ言って、二人は謎の空間に毎度のごとく消えていった。
「……ふん。いつもアホなことばっかり言ってるくせに」

ただ、なんとなくむしょうにその空間のあった場所に頭だけ下げておくべきだと感じた。

ん？　頭を下げた先に白い紙が見えた。

拾い上げてみると、なにか書かれているようだった。

「それってツンデレっぽくない？　おめでとう！　キミはツンデレ要素を手に入れた！」

ついでにどこからか聞こえるファンファーレ。

それが鳴り終わるのを待ってから、こう言ってやった。

「男のツンデレに需要はねぇよ！」

危険地帯

「さて、今日も始まったわけだが」
なぜか二人は正座している。二人というのは、もちろん天使と悪魔である。
かしこまった感じの二人はずずずっとコーヒーをすすっている。今日はいつもの番茶や緑茶が切れていたので、仕方なくコーヒーを出した。
文句の一つでも言われると思ったが、何も言われなかった。おかしい。
「なんだお前ら？　なんでそんな座り方なんだ？」
とりあえず疑問をそのまま口にしてみた。
「……ふぅ」
「はぁ……」
二人はなにも答えない。まるでこちらがこれから詰問でもされるような雰囲気。
その様は、学校の問題児が三者面談に駆り出されたかのようだ。
誰もしゃべらない。誰も口を開かない。誰も口火を切らない。
無言のままというのは本当に辛い。
それほどしゃべる人間というわけではないが、性質がツッコミのせいなのか、自分から話題を作ることは苦手だ。
普段の生活でもそう。俺がしゃべり始めると、周りは静かになってしまう。それも耳を傾けるというわけではなく、完全にスルーしているという感じである。もしかしたらイジメかなにかの類なのかもしれない。俺としてはなんだったら邪魔してくれたほうが楽だ。
そんなこっちの気持ちを知ってか知らずか二人はいまだに黙ったままだ。
「あの～……このままだと、俺のモノローグだけで今回が終わって

しまうんですが……」
つい敬語になる。こちらが下手に出てまでも、なんとかして盛り上げなければならない。
ちなみにモノローグは得意ではない。普段から物事を考えながら生きているわけではないし、たとえなにか思いついたときでもメモを取るというマメなこともしない。
まるで作家モドキ失格。失格。失格。
形から入るというわけではないけれど、枠というものは重要だ。自分がそうであるかのように、自分を錯覚させるためには有用な手段である。
たとえば、こうやってキーボードで文字を打ち込むだけでなく、ペンを持って、原稿用紙に自らの手で書くということもその一つだし、自分の姿かたちをそのように着飾るのも一つだ。
そうすることでやる気を出すというかギアを入れるというか、まぁ説明はしづらいがわかってもらえるとうれしい。
……。
書くことなくなった。
夏休みの宿題の読書感想文以来のモヤモヤ。ペンが進まない。助けて赤ペン先生。
泣きそうな顔で二人を見る。
あいかわらず悪魔も天使も目を閉じてなにかに耐える修験者のように座布団に座っている。
「そろそろ限界なんですけど……一人でこの物語を続けるのって難しいんだよぅ……ホラ、俺っておもしろくない人間じゃん？　お前らとの会話が頼みの綱なんだよぅ。三回目にして、本当の存続のピンチなんてことは避けたいんだよぅ」
そのときは本当に泣いていたかもしれない、とこれを書いているときは思った。それくらいその場の空気がしんどかったのだ。
「あるじゃねぇか。おもしろいかどうかはわからないが、お前ができる話」

痺れを切らしたのかとうとうもらす悪魔。
「え！　なになに？　教えてよ～！」
さすが悪魔！　いや、悪魔はそんな手助けする存在じゃないんだろうだけど、なんだかんだ言って兄貴分で面倒見のいいコイツに助言を求めるためにすがりつく。
「……お前、この３，４日間なにしてたよ？」
「……」
うん、ごめん。やっぱそのことだよな。
「私たちのこと忘れて楽しんでたんでしょ？　そのことでも書けばいいじゃない。私たちなんていらないくらいの面白話が書けるくらいのことしてきたんでしょ？」
天使が続いて俺を責める。
そう、俺は本当に忘れていた。いや、思い出さないというか、なんというか。
「俺も書きたかったさ！　書きたかったけど、できなかったんだから仕方ないだろ！」
「ふぅ……」
「はぁ……」
つい、言い訳がましく叫んでしまう。そして振り出しに戻ってしまった。

この４日間。俺は旅行に出かけていた。こいつらを置いて。
行き先は大都会の東の都。
そこで欲望を吐き出してきた。そう、いろいろと。ついでに言っておくが、別にエロい意味はない。単純に趣味を丸出しにしてもかまわない素晴らしい電気街に行ってみたかっただけという意味である。他意はない。……本当だよ？　そりゃ、中には少し……そういうものも……ごにょごにょ……。
とにかく！　昔から夢見ていたあの場所にこの両足で立ってきたのだ！

右を見ても、左を見ても、同種族。
動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種の中のちょっと二次元に興味のある者たち。
つまりはオタクと言われる部類である。
最近の傾向として、オタクという言葉はアニメや漫画を主流とするオタクたちのことを指している。それ以外の者は、〇〇オタクや××オタクというように、その対象物をオタクの前につける。
ちなみに自分はプレーンなオタクというものである。たぶん。
自分は社会学者というわけではないので、詳しくはわからないが、そういうモノの見方であってると思う。
まぁ、このようにここでこうやって作家モドキのようなことをしているのもその一環というか、自分の好きなものの中には薄い小説、または軽い小説と表現するものがあったりして、その影響も少なからず受けている。
認めよう。

諸君　私はアニメが好きだ
諸君　私は漫画が好きだ
諸君　私はエロゲが大好きだ
中二病が好きだ
日常垂れ流しが好きだ
感動系が好きだ
熱くなれる系が好きだ
だらだらが好きだ
人生が好きだ
文学が好きだ
友情が好きだ
正体不明のものが地球を征服するものが好きだ
自宅で　自室で

ソファで　ベッドで
ＰＣの前で　モニターの前で
トイレで　ネカフェで
イベントで　ショップで
この地上で行われるありとあらゆるオタクと呼ばれても仕方のない行動が大好きだ

「こいつなんかいきなり演説し始めたぞ」
「きっとなんかのパロでしょうけど、ま、放っときましょ。私たちが放っとかれたくらいの期間は」
「ったく……旅行に行くなら、俺らも連れてけっての。カバンに入りきらないからって置いていきやがって。俺だって、掘り出し物見つけに行きたかったっつうの」
「あら？　悪魔もそういうのに興味ありますのね？」
「ったりめーだろ？　路地裏の雑居ビルの七階くらいに位置する場所とか行きてぇよ」
「私はメイド喫茶かしらね～。こう、『お嬢様？　お茶のおかわりはいかがですか？』とか言われてみたいわよ。さっきから誰に向かって演説しているかわからないコイツがこ～んなネット回線的な意味の光が届かないド田舎なんかに住んでるから悪いのよ！　喫茶店どころかコンビニすらないようなあんな場所にね！」
「ま、そりゃ生まれる場所と親は選べないからな。それでも俺はお前と違って気に入ってるんだぜ？　住めば都。周りは山だらけで静かだから、夜中まで騒いでても家族以外には迷惑かけないし、車さえあれば割とどこでも行けるし」
「その車を動かす燃料のガソリンを入れることすら不便でならないけどね」
「それは言えてる。でもな、ああいう都会ってのはたま～に行くからいいんだ。俺も昔、ちょろっと出かけたことはあるが、あれは住めたもんじゃねぇな。観光地に住もうなんてどう考えてもおかしい

発想だろ？　常に人が絶えないんだ。俺らみたいな日陰モンにはそんなまぶしい土地はそもそも似合わないんだよ」
「悪魔ならいざ知らず、天使なのに日陰者扱いですか……」
「れっきとした日陰モンだろお前。こないだだって、どこぞの巨大掲示板でカップリングについて討論してるとき、あまりにもマイノリティ過ぎて村八分にされてただろうが」
「あ、あれは単純に趣味ですもの。私はメインヒロイ……ヒーローよりも一巻に五コマくらい出てくる脇役のほうが好きなんです！　ああいうキャラはなんていうか、儚い感じがいいんですもの。戦いメインなお話ならあっという間にフラグを立てて退場。恋愛モノなら既に彼氏彼女がいる、もしくは絶対的にできない敵役みたいな、ね」
「完全に日陰な考え方だな、お前……」
「日陰上等！　むしろそこを愛さずに真にその作品を愛していると言えましょうか！　反語！」
「おい、お前まで演説し始めるつもりか？　やめろ、俺の出番がどんどんなくなるから」
「コ、コホン。とにかく、今回は復讐回と銘打って、コイツとは絡まずいきましょう」
「おｋ　把握」

――であるからして……うん？　なにか聞こえていたが、まぁどうでもいい。
えーと、どこまで話したっけ？　そうだ、オタクが市民権を得たところまでだったな。
ってこんな俺の思想信条を語って終了なんて許されるハズもない。そんなものは違うＳＮＳでやればいいんだ。
「おい！　まだだんまりかよ、コンチクショウ！　そういや、タイトル案の件なんだが、見事に玉砕した！　親切心の塊のような人は現れなかった！　絶望した！　この無情な世の中に絶望した！」

ちきしょう……どうここの人と関わり合いになっていいかわかんねぇぜ……。
もちろん、有名どころは読んだ。が、感想を求められても、おもしろかったーとか感動したーとかぐらいしか思い浮かばない俺の貧弱な語彙力では書けなかったんだ！　察しろ！
そもそも、俺は常にぼっちで生きてきたんだ。友達？　は！　そんなもんいるかっての！　いたら、こんなところでこんなこと暴露する話書かねぇよ！
……うぅ……。彼女？　そんなものより友達がほしい……。俺は友達が少ないどころかいねぇよ！　０だっての！
俺以外滅びろ！　いなくなれ！　ド〇え〇〜ん！　地球破壊爆弾、今なら使い道あるよー！　フヒッーヒーッヒッヒヒー！

〜ただいま、不適切な発言、表現がありましたことをお詫び申し上げます。映像が戻るまでしばしお待ちください〜

はぁ……はぁ……。
ま、とりあえず、この物語、イヤ、すでに物語なんて呼べないけど、タイトルはこのままで行くしかないみたいだ。もともと、蜘蛛の糸にもすがる思いだったけど、見事に切れたよ……。
さて、どうしようか？　一応、引き続き募集だけしておくか。
汚い話をすると旅行に行っている間にもしかしたらなにか進展があるかもしれないと思っていたことをここで告白しよう。
見事に裏切られたけどね！　それどころか読んだ人すらいなかったけどね！
ま、それは仕方ない。自分の時間の使い方は自分が好きなように決めればいいんだ。こうやってここでこんなくっだらないことを書いているのもまたよし、だ。
なのにもかかわらず、こいつらときたらしゃべる素振りもなければ、絡む気すらないみたいだ。そんなに怒ることか？　置いて旅行

に行ったことが。仕方ねえだろ、入りきらないし、そもそもネット関係ができる機材がなかったんだよ。ネカフェ？　そんな無駄遣いできるかっての！　こちとらフィギュアとかゲームとかレア物を見つけて買うのに必死だったんだよ！

※ここから一時間後、改めて見直したところあまりにもひどい内容にめまいを覚えたが、推敲しないという信念のもと、このまま。

「メタすぎんだろ！　筆者の気持ちダダ漏れじゃねぇか！　俺は？　俺というキャラってなんだったんだ？　俺＝筆者なのか？　違うだろ……一応、当初の目的としては。やべぇ路線はずれすぎた。というわけで、ここからは普通にやりたいんだけど……」

それでも黙りこくる二人。こいつぁマジだな。仕方ねぇな、秘密兵器投入すっか。

「もちろん、お前らのこと忘れてたわけないだろ？　ホラ、これ」

ガサガサと茶色の袋から箱を取り出す。

片一方はなにかと肌色の多いパッケージ。もう一方はなんかメガネをかけたリアルでは絶対にいそうにない男子二人が裸でベッドに横たわった表紙の本。

「お土産。正直、あんまり俺の趣味じゃなかったんだけど、お前らのために買ってきた」

それぞれお土産を手にする二人の目が輝く！　うおっ！　まぶしっ！

「ま、マジか……これ」

「ホントにもらっていいの？」

やっと口を利いてくれた。

「お前ら、お寺のわけわからんあんこ入りの食べ物のほうがよかったか？」

「んなわけねぇだろ！　マジ、サンキューな！」

「これで十分、甘いものは摂取できますから結構ですわ！」

さっきまでの無表情はどこへやら。さっそく中身を見て、ニヤニヤし始める二人。まぁ、喜んでくれたみたいで俺もうれしい。人を笑顔にさせるってのはこっちの気分もよくなる。

「じゃ、だいぶルートは逸れちまったけど、ここから！　ここからいつもどおりやってこー！」

オー！　とこぶしを挙げる。……俺だけ。あ、あれ？　俺だけ？

「じゃ、ちょっくらこれいじってくるから、あとは適当にやっといてくれや！　じゃな！」

「私も読んできますから。ついでに新作も描いてくるわ。あーまた、私の創作意欲が湧いてきたー！」

それだけ言い残して、これまたいつもどおりの空間に消えていく二人。

「イヤ、ちょ、まさか今回これだけ！？　これで終わり！？」

大丈夫か？　この話。このままアップして大丈夫なのか？

……イヤ、オチとかないから！

湿り気

しとしとと雨音がする。
今日は全国的に雨、だそうだ。
縦長なこの国で全国各地一斉に雨というのは珍しいことなのかもしれない。
そんな天気の中、今日もいつものメンバーが自室に集まっているわけだが……。
「じめじめしてんな～」
「ドライでもかけなさいよ」
気温はそれほど高くないのにエアコンをつけろとうるさい二人。
「ウチの地方は年がら年中湿気に覆われているからな、仕方ないだろ。エアコンつけるのももったいないし」
昔、一人暮らしをした経験から、エアコンを使った月と使ってない月では電気代が一ケタ違うことを知っている。
元々、湿気が多い場所ではそれなりの対策、例えば、家の構築がそのようになっているとか、そういう道具を使っているとか、まぁそんなわけで人が不快に思う以外はたいして被害はない。
あるとすれば虫が活発に動くくらいか。あ、また小バエ。
「洗濯物も干せないし、最悪だな。ベッドのシーツまで気持ち悪い」
「漫画読みながら言うセリフじゃないな。そんなに言うなら、コインランドリーにでも持ってってくれ」
最寄のコインランドリーまで徒歩一時間はゆうにあるが。
そんなわけで一年で二回目の梅雨の時期は、割とダラダラしがちである。五月病の再来とでも言えばいいだろうか。
外に出れば雨。中にいれば湿気。
どこにいても不快である。

おかげでこいつらの機嫌も悪い。もちろん俺自身もである。
そういうこともあって、まったく話が盛り上がらない。それどころか始まらない。
前回の最後にお土産で機嫌をとったのはいいのだが、こればっかりは俺にはどうしようもない。
今日はサンデイインザレイン的なモノローグだけでお送りするのもいいかもしれない。

ＢＧＭをかけよう。曲はもちろんエリックサティ作曲『ジムノペディ』で。

ズンチャーンズンチャーンズンチャーンズンチャーン……テ、テ、テ、テ、トゥン、テーン……。
なんというかこの曲は他のクラシックとは一線を画していると思う。
音楽には詳しくは無いが、不安を煽るような、それでいて穏やかであるような、あきらめにも似ているようなそんな曲調。
とまあそれでいて聞き入るような曲ではなく、おしゃべりの後ろに流れている、そのまんまバックグラウンドミュージックってことが印象深い。
そういう意味では、例の憂鬱なアニメでの使い方は自分としては間違っているというかなんというか。
そんなことを言っている自分でさえ、こうやってモノローグなのだからなにも言えないが。

うん。それじゃたまには自分の話でもしてみよう。ていうかそれ以外に話すことなんてできない。
片一方は漫画タワーを形成し、これから一気読みするであろうことが容易にわかるし、もう一方は湿気にやられてベッドで寝転んでいたところ睡魔に負けて、いつの間にか寝息を立てている。

さて、なにを話そうか……。

時期はすでに秋真っ盛り。真っ盛りという表現が正しいかどうかは置いておいて、確実に夏とは異なる気温のこのごろ。

自分はご多聞に漏れず、というわけでもないが、季節の変わり目ということもあって、風邪を引いた。もうそれは自分で自分を呪いたくなるくらいに完膚無きまでに。

頭は痛いわ、ノドはイガイガするわ、おまけに幻聴や幻覚まで見えるくらいまで熱に浮かされる始末。

こんな状況でなにができるかって言えば、そうだね、プロ……妄想だね！

幻聴や幻覚をも利用し、妄想するその様はまさに達人の域にまで達していると思うのですが、ま、そこはいいでしょう。

問題は中身なわけで、例えば、ありきたりな世界に自分が飛ばされて、ありきたりなヒロインと出会い、ありきたりな冒険をして、ありきたりな超強いラスボスと戦い、ありきたりな祝福をされ、ＥＮＤ。

こういうときっていうのは割りと熱が下がっている証拠で、平穏無事であることを心から受け入れているといった心境。

他には、謎の宇宙からの侵略者と戦うとある国のエースパイロットとかで、故郷に残してきた恋人を思いつつ、目の前の敵をいかに撃破するかを考え、さらに無線でピンチに陥った僚機を気遣い、本部に連絡を入れるといった超人的かつ聖徳太子のようなアクロバティックをこなす。

こういうときは熱が高めで、身体全体が非鳴を上げているというような状況だったりする。

そういうとき考えていることって割と自分自身でもおもしろいなぁとかこういうの書けたらいいなぁとか空想を広げるんだけど、結局はどこかで頓挫したり、そもそも忘却してしまったりで、形にならないことが多い。

実はもったいないことをしているのかもしれない。
だから最近は、机の上にコピー用紙とボールペンを欠かさずに置くようにしている。
どんなに些細なことでもメモしておけるようにしておくことで、こうやっていつか文章にするときのネタになったりしているのだ。
どうだいボブ？　こんな素敵なことができるんだよぅ～？　今ならこれに使い始めて何日かですぐ出なくなるボールペンのインクもついてくるんだ。
え？　でもお高いんでしょう？　って？　ちっちっち、甘いなぁボブはぁ、もう練乳と蜂蜜を混ぜたものを鍋でグツグツ三日三晩煮込んで、さらに砂糖、黒砂糖、生クリーム、あんこをそれぞれ大さじ五杯入れ、さとうきびにかけたものを、全国のどこかにいる親のスネをかじって生きてきた挙句、大学を二留した佐藤くんの人生観や社会に対する不満を聞きながら食べるくらいに甘いよ。
今なら、なんと定価二万数千円するところを、今日は奮発して一万九千八百円でご提供なんだぁ～。

「誰かツッコめよ！」
つい、ありえないくらいわかりやすいボケを挟んでしまった。
「今日はモノローグで終始するんじゃなかったのか？」
「なんでそういうとこだけ俺の心の声が聞こえてるんだよ！」
「え、そりゃ、俺、悪魔だし……ほら、なんていうか、こう、悪魔的な力というか」
悪魔が悪魔的な力を持っているとは小学生がする説明くらいひどいぞ。
「それじゃあ天使も天使的な力持ってるのか？」
「もっちろん」
そういって立ち上がる天使はトコトコと部屋の中心へ移動する。
すると急に床からマイクスタンドが現れ、部屋は薄暗くなり、天井からはネオンボールが降りてくる。

「それでは聞いてください。残酷な天使のテー〇」
「カラオケかよっ！」
ぐいっとマイクを奪う。
「せめて、せめてサビだけでも～よよよ……」
いつの間にか着ていた着物の袖を濡らす天使。アニソン歌うのに着物はおかしいだろ。
「それじゃあ、俺の銀〇鉄〇9……」
「おま！　それ、本気でヤバイから！　歌詞だけで訴えられるから！　ていうか、お前らの能力ってそんなんしかないのか！？」
「何を失礼な！　こう見えてもれっきとした天使三年目のペーペーなんだからね！　多少なりとそれっぽいことぐらいできるわよっ！」
自分でペーペーと言うってことはたいしたことないんじゃないか……とか思っていると、今度は窓際へ移動して、外に向かって指を指す。
「ほら、あそこにこれからすれ違う男と女いるでしょ」
外へ目をやると、たしかにこれからすれ違う、多分四十くらいのおじさんとそれからセーラー服姿の女子高生が見えた。
「それじゃあいくわよ。……テヤっ！」
指先からピンク色の光線を出す天使。その光線がすれ違いざまの二人に直撃する。
すると――
「ああ！　ロミオ！　ロミオなのね！」
「ああ、そうだよジュリエット！　僕達はやっと出会えたんだ！　もうキミを離さないから！」
「ロミオ！　もう決して離さないでね！」
なんの接点もなさそうなおじさんと女子高生が急に抱き合いながら愛を語り合う。
「な、なんじゃこりゃー！　これ、お前の力なのか？　すげーじゃん！」
素直に感心して褒めると、ふふんと鼻を鳴らす天使……と忌々し

そうに眺める悪魔。
「俺だってそれくらいのことできるし！」
そう子供のような対抗心むき出しでこちらも窓際に移動する。
「そらよっと」
悪魔の頭の触覚的部分から青白い光線が発射され、ラブラブな二人に降り注ぐ。
すると――
「キャー！　あんたなに抱きついてきてんのよ！　誰かー！　誰かー！　痴漢ー！」
「お、俺だって抱きつきたくて抱きついたんじゃない！　いつの間にかこうなっていたんだ！」
必死に弁明するおじさん。しかし、女子高生の叫び声に付近の民家からドヤドヤと人が出てくる。
――それから五分後、あっという間におじさんは警察に連れられていってしまった……。
「どうだ！　これが俺の力だ」
「おぉい！　罪の無いおじさんになんてことを！」
「世の中そんなに甘くないってことね……中年が女子高生と恋に落ちることは法律的にも難しいのよ……」
「イヤイヤイヤ！　お前らが変なことしたからだろ！　あああ、おじさん……せめて残りの人生楽しく生きてくれ……」
冤罪？　で連行されていったおじさんのこれからを祈りながら窓を閉めた。

「それにしても、お前らすげぇな！　たしかにそりゃ超能力ってヤツだわ」
気を取り直して素直に感嘆を述べる。
「まぁ、これくらいは初歩中の初歩というか」
「なんてったって悪魔と天使だからな。人を操るくらいわけなんてねぇってことよ」

腐っても鯛とはこのことか。ん？　ちょっと待てよ？
「お前、今、操るって言ったか？」
「ああ、それがどうかしたか？」
「もしかして今までに俺のこと操ったこととかあるのか？」
「……あー……いやー、それは……」
明らかに歯切れが悪い生返事は裏を返せば、正直な回答になっている。
「おい！　どの場面で俺を使ったんだ！　言ってみろ！」
「いや、あの、その……悪魔と言ってもですね、その人間の娘にはそれなりに興味があるわけですよ。あぁ、そうそう、日本人が外国人に恋したりするみたいな感じで」
「なんて俗っぽい悪魔なんだ……で？　なにしたんだ？」
「その、ナンパしてきてもらおうかなって……」
「ほほぅ、で、結果は？」
「まぁあえなく惨敗だよね。俺ももう少し考えればよかった。だってお前、服のセンスないし、明らかにひきこもりにしか見えないし、おどおどしてそうなのに、いきなり積極的に話しかけてこられたらたしかに気味悪がられるよな」
「……天使は？　俺を操ったことは？」
「あぁ～えっと～あれは、大分昔の話なんだけどぉ～……」
「前置きはいいから」
「はいはい。その……ずーっと欲しかった本があったんだけど、ほら、私って天使でしょ？　そうそう簡単に人前に姿表せないのよ。だから、いつもなら密林的な自動的に物を運んできてくれるところに頼んじゃうんだけど、レア物でねぇ……それをちょっと買ってきてもらおうってね」
「ちなみに本の内容は？」
「私の好きなジャンルに決まってるじゃない。いや～あのときこっそり後をつけて行ったんだけど、さすがに奇異の目で見られてたわね～。だって、男がＢＬ……」

「……もういい」
なんかどっと疲れた。
それこそ、怒る気力さえなくなった。俺の今の気持ちはご随意に思案しやがってください、どうぞ。

「ま、まぁ、いいじゃねぇか。俺らってこれくらいの能力しかないし。俺らがいることで世界を救ったり、壊したり、泳げなくなる代わりに身体がゴムになったり、ノートに人の名前書くこともないし、ナ〇ック星人と戦う必要だってないぞ」
「そ、そうですわよ。他に設定なんてないですから。人畜無害そのもの！」
なぜか加害者が励ましてくれる。
やけにジムノペディが心に染みる。
俺ってなんでこいつらといるんだろ？
「さ、さぁ、気を取り直して執筆作業に戻りましょ！」
「そうしましょったらそうしましょ」
やけにテンション高めで俺をＰＣの前に座らせようとする二人。
それでも、今はそんな気分にはなれなかった。
「いや、もうマジでほっといて……」
そういって。俺はベッドにもぐりこんだ。

……ここから悪魔のターン。

てなわけで筆者が不貞寝をしてしまったｋら、俺が書くことにするぜ！
なんてったって、今まで大体七千文字くらいで書いてたからな。
残りの二千くらいは二人で埋めようやということで分担作業にすることにした。
俺の名前は人呼んで悪魔。ちゃきちゃきの江戸っ子ぽさを目指す

ナイスガイさ！
おおっと、そんなに俺のことを知りたいのかい？
でも、それはまだ早いなぁ。
もう少しレベルアップしてからか、とりあえず四天王最弱くらいは倒してくれないと、俺の本名すら出すわけにはいかねぇな。
それからちょいちょい詳しく語られることにはなるだろうけど……っておいそこ！　ググるなカス！
まったく、最近のヤツラはゲームの楽しみ方ってもんがわかってねぇ。
ちょっと行き詰ったらすぐ攻略サイト。
それならまだしも始める前から攻略サイトを開いているヤツもいるときたもんだ。
おいおい、それじゃただの作業になっちまうだろうが。それで楽しくシナリオを追ったり、システムを理解できるんかい？
そりゃあ、ゲームの楽しみ方は人それぞれだがよ、とりあえず初めてプレイするときぐらいは作者の意図を汲んでやろうぜ。
作る側からしたら、ここで熱くなったり、感動したり、行き詰ったりってのを期待して作ってるんだぜ？　それに乗ってやるってのも一興ってもんだろ？
ああ、懐かしいな。まさか、最後は祈るだけで倒すなんてな……普通、気付かねぇよ。
それでも、途中にヒントはあったんだ。プレイしている本人の名前を入力するところとかな。
この話がわからねぇヤツは是非、母親的なタイトルのＲＰＧをやってみることだな。もちろん、攻略サイトなんて見ずにな。
おっと、ついつい熱くなっちまったぜ。まだまだ言いたいことはあるんだがな……まぁこういうことをうだうだ書くと、老害だ～人それぞれだ～なんて言うヤツも出てくるからな。ここいらでやめておく。

……ここから天使のターン。

悪魔の書いた文を見たけど、なにあれ？　最終的にただのゲームの話になってるじゃない。

一応、初めてこうやって書くんだから、もっと私達のパーソナル？　な部分とか書けばいいのに。

と、言っても、私にも書けるようなことなんてないんですけれど。

私の名前は天使、探偵ではない。いつの間にか眠らされて、身体が縮んでいたなんてこともない。

ただの天使。ただの……ただの……。

うっ……私だってこんなただの天使に生まれたかったわけじゃないわよ！

生まれたときからお前は天使のようなヤツだと言われ、なにかにつけ、あなたはいい子だねと褒められ、そのせいで色んな制約を受けてきたわよ。

趣味だって小さいときはお人形遊び、大きくなってきてからは友達と談笑したり、買い物に行ったり、化粧に凝ってみたりくらいしかできなかった……。

本当はもっと違うことをしたかったのに。

化粧だってそんなに興味ないし、服だって毎日違う服が着れればそれでいい。

そんな私が天使？　嘘でしょ？　とか真剣に悩んでいた時期だってあった。

……本当は寝る前の少しの時間だけだったけど。

そんなとき、彼と出会ったの。

彼は優しかった。どんな私でも受け入れてくれた。

私は彼におんぶに抱っこだった。仕事の愚痴とかもたくさん言ったし。

そんな日々が約一年くらい続いたある日だった。

唐突に別れを告げられたの。

なんでも他に好きなヤツができたからお前とは付き合っていけない、だって。
彼は私だけを見ていてくれているようでそうじゃなかった。優しかったと思っていたものは、ただ単に興味がないから適当に返事してくれていただけだった。
悔しかった。だから、私はそれまで以上に自分の中に閉じこもるようになった。
普通、こういうときは他のなにかに狂信的なまでに打ち込むとかになるんだろうけど、そんな漫画みたいな展開は私には用意されていなかった。
……あら？　もう、こんなに書いたのね。悪いけど、続きはまた今度ってことで。
ちなみに今まで書いたものの約八割はフィクションだからあんまり鵜呑みにしないでね。
この情報化社会では正しいと思える情報は自分の知識と経験に照らし合わせなきゃならないのよ。
まったく、生き辛い世の中になったわね……。

……ここから俺のターン。詳しく言うと、夢の中のターン。

なんで夢の中で思ったことが文章化されているかなんて知ったことか。
そんなことより、残りが三百しかない。
これだけでどうやって今回を閉めろと？
無理だから。
前回使っちゃったから、オチなんてねぇよ！　ってヤツ。
あれはあれで一つのオチなんだから、二回目はないんだよ。
そういや、どうやってあの二人はここまで書いたんだろう？
あいつらＰＣで文章が打てるわけでもないのに。
イヤ、物を触ることぐらいはできるんだけど、そもそもＰＣとい

う人間の技術の結晶というものを初めて知ったのは、俺と出会ってからだから……一年くらい？
しかもその間、触っていた様子もない。
密林とかで物を買うときは基本的に俺が操作していたし、ニコニコ的なアレも俺が登録してやった。
そんなヤツラがどうやって文章を打てたというのだろう？
その疑問だけを残して今回は終わりにすることにした。
ああ、それともう一つ。
なんでＰＣの前で寝てんだろ、俺。
ちゃんとベッドに入って寝たはずなのに……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7206w/

タイトル未定！！！

2011年9月28日03時29分発行